

# 十勝毎日新聞

発行所  
十勝毎日新聞社  
〒080 帯広市東1条南8丁目  
電話=編集②2121、広告  
③2323、総務・販売③2222  
©十勝毎日新聞社 1988

## 進め宇宙開発

スペースポート調査団同行記

……6

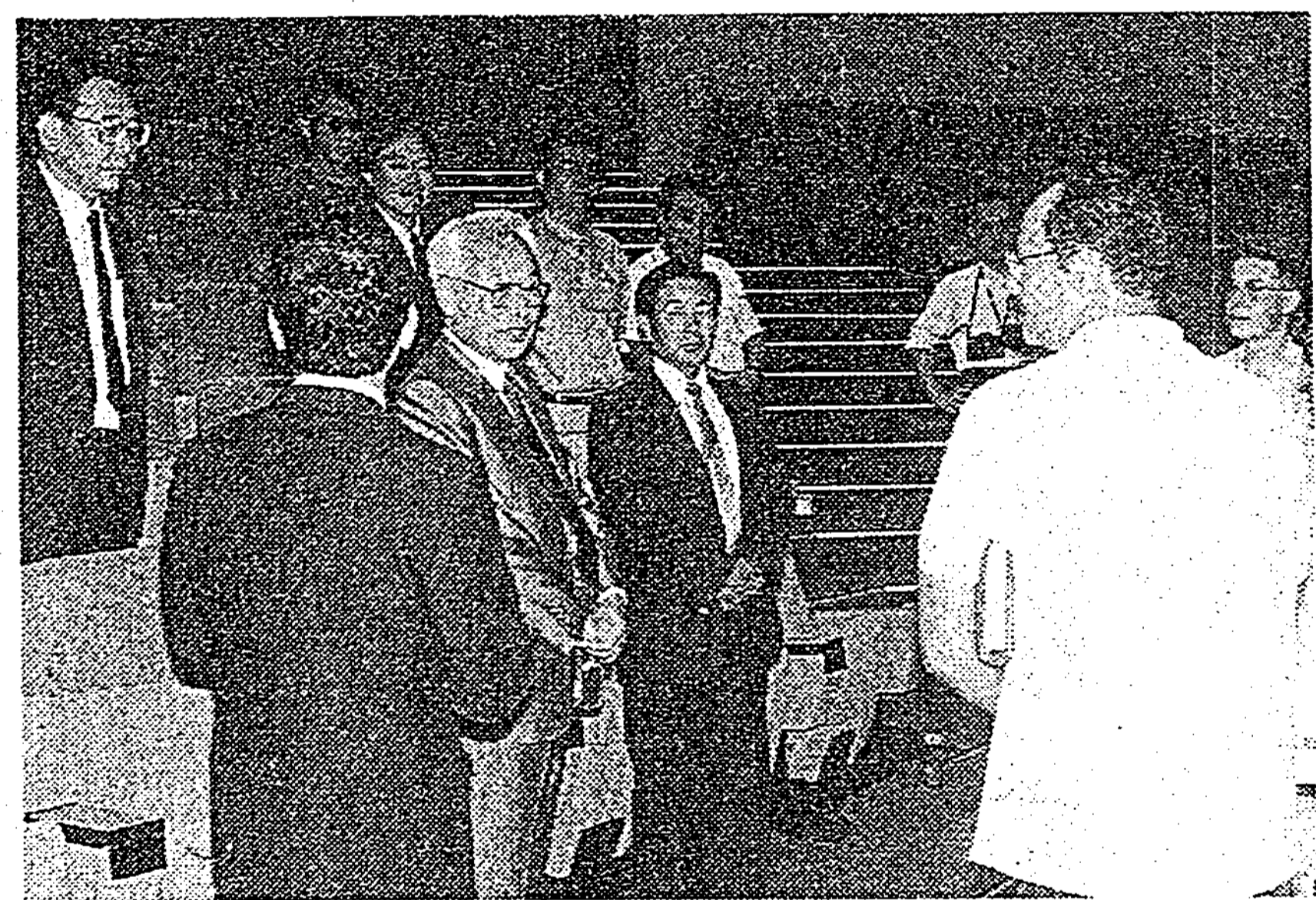
「もし、本格的な会員組織にすれば、千や二人は軽く集まります。ぜひ、一度遠野に来て地元熱意を見ていって下さいよ」と遠野・宇宙港誘致を考える副会長の佐藤一男氏は口元を緩めた。成田空港で交換した名刺の表面には「宇宙港を遠野へ」をキャッチフレーズに、そこからスペースフレンドが飛び立つ図柄がプリントされていた。地元の約百人の従業員を抱える建設業の社長。今回の調査団には自費で参加した。私生活としては世界のスペースポートを見るのは全く初めて。それだけにじっくり立地条件などを観察していきたい」と小笠原隆男遠野市議会議員産業建設委員長と、同市企業調整課の遠山豊課長が口をそろえる。

### 自治体の熱意

## 民話の里に宇宙港を

### 岩手県 道に負けじとPR

「遠野物語」で知られる、民話の古里、岩手県遠野市。誘致運動の推進母体だ。なぜ、民話のイメージとは似つかぬ現代科学の粋を集めた宇宙基地へ目を向けたのか。「主産業の米、タバコ、畜産を中心とした農業を取り巻く環境は厳しく、過疎化が進む一方。市には広大な適地があり、スペースポートの立地に着手したんです。地熱資源協賛会」がそれぞれ



スペースセンターが与える地域への影響を調べるためギアナ商工会議所を訪れた一行



松田団長(右から2人目)と岩手県のメンバー

調査を進めていきたい」と池田課長補佐。

一方、道参事監室の大谷主査は「北海道はやはり広さが売り物。実際に地域と密接にかかわり、自然に調和しているスペースセンターの姿を見て、道構想の目指す方向が実感出来た」と目を細めた。「今は各地域が連携して日

本の宇宙開発を盛り上げていくことが先決」とライバル感を表に表さない両代表。しかし、専門家に交じっての各スペースセンターでの視察姿勢などは両地域の熱意を感じさせた。「日本の宇宙開発は千一世紀に向けて辛抱強く基礎固めをしていく段階。盛り上げていくためには各専門家とともに地域の取り組みも不可欠。頑張っている」と松田源彦団長。笑顔で団員たちを見回した。

再生スペースシャトル打ち上げ前後の訪米で、宇宙開発にかける米国民の意気込みを痛切に感じ、スペースセンターを中心に地域が急速に発展するケネディスペースセンターのあるオランダ、ギアナ・スペースセンターの仏領ギアナクール市を目的の当たりとした。それだけにぜひ大樹・十勝に宇宙基地を。そんな願いを強くした十五日間だった。

(近藤 政晴記者 おわり)

岩手から4人も

スペースポート調査団メンバー

ライバルが火花

勢は各チームを回り、一部は可能だということが分かつつ置いていく。北海道は誘った。シンポジウムなどで県民の理解を深めるとともに、